



TITLE:

(随想)泌尿器科の独立について

AUTHOR(S):

落合, 京一郎

---

CITATION:

落合, 京一郎. (随想)泌尿器科の独立について. 泌尿器科紀要 1959, 5(11): 1111-1112

ISSUE DATE:

1959-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111861>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 5 卷 第 11 号

昭和 34 年 11 月

## 随 想

### 泌 尿 器 科 学 の 独 立 に つ い て

東京大学助教授 落 合 京 一 郎

戦後、日本においても大ていの大学医学部には講座が新設されたり、大病院にも泌尿器科が独立して置かれる傾向が多くなつてきている。ただこの傾向に逆行しているのが、大学院設置基準ではまだ皮膚・泌尿器科が一講座になつているという点である。泌尿器科が独立したといつても、このような考えはまだまだ根強く残つているらしい。いづれは間もなくこの不思議な基準は改められ、はつきり独立した泌尿器科講座となるらしいが、これは当然すぎるほど当然である。

しかし、われわれは当然だと考えてはいても、他の医学分野の人まですべてが当然と思つてゐるわけではない。さすがにもう泌尿器科とは性病科のことだと本当に誤解している医師はまずないであろうし、皮膚科の付属物だと考えている人も少ないとは思われるが、それなら泌尿器科というものが具体的にはどのような学問かということを、正しく認識している人が多いとはかぎらない。

これは上にも述べたように、日本の泌尿器科の生れてきた事情が、外国とちがつて特殊だからであろう。アメリカにしろ、ヨーロッパにしろ（例えばドイツ）、泌尿器科というものはもともと外科から分離独立したもので、日本のように皮膚科（内科）と同居していたものが2つに分かれたものではない。つまり、泌尿器科は本来、外科という広い領域のうちの一つの特殊な分野のはずである。アメリカでは、すでに大部分の大学や病院では泌尿器科が独立しており、外科の下におかれてるところ、例えば **Section of Urology, Department of Surgery** というような呼称のところはむしろ稀れである。ということは、現在の泌尿器科というものが、外科が片手間にやることは到底不可能なほどに、急速に進歩発展しその領域を拡げるに至つたからである。好むと好まぬとにかかわらず、どうしても外科から分かれて、一本立になるべき必然性をもつていたからといつてよい。

ただ不思議なことに、ドイツでは独立した泌尿器科学講座をもつ大学はわずかに2、3に過ぎない。大病院といつても **Städtisches Krankenhaus** であるが、ここには一応泌尿器科 **Klinik** はある。しかし今もつて外科と同居していたり、外科のうちに含まれた格好のところはかなりある。独立の必然性を持ちながら、独立できないのには色々事情や理由があるにちがいない。これは市川教授から伺つたことであるが、前立腺手術という大きな金蔓を失いたくないので、外科がなかなか泌尿器科を分けさせないという人もあるという話であつた。あるいは大きい理由の一つかも知れないが、とにかく著名な泌尿器科医は、いつまでもこんな状態だとドイツの泌尿器科はどんどん遅れてしまうと、現状を心から憂へていることも事実である。戦後のドイツ泌尿器科はわれわれの目から見て、確かに低調であり、筆者も

今回短かい期間であるが、十数ヵ所の主な Klinik を訪問して、このことをはつきり知ることができた。そしてこれがすべて、泌尿器科学が外科の片手間のように扱われているためだとはもちろんいえないが、少くとも大きな障害になつていっていると見てよいようである。

この点では、現在の日本の泌尿器科の方がはるかに恵まれているといえるわけである。しかしそれはまだ形だけのものであつて、日本の泌尿器科が皮膚科から分離したものだという生い立ちは、まだまだ大きいひつかかりになつていいる。さすがに戦後に育てられた医師はそうでないとしても、泌尿器科医は皮膚科から転身したものだという先入感は全く払拭されてしまつたわけではない。そして少なくない病院が、なお皮膚科・泌尿器科の分離に踏み切れないでいる。たまに分離させたいというので相談をうけることはあるが、その時設備とか人員がこの程度は最低限必要だというと、そんなにかというような意外な顔をされたりする。皮膚科の一部でやれるぐらいに考えており、現在の泌尿器科というものが高度の智識と高度の技術経験を必要とするものだということを、本当に知らないからである。このまだ残つていいる認識不足が、皮膚科・泌尿器科の分離独立を妨げており、ひいては少壮有為の泌尿器科医の職場をも狭くしていることになつていいる。

段々と判るようになるとして、これを拱手傍観、ただなりゆきに任せてよいものではない。困難ではあろうが、独立の必要性と、更にその合理性を、積極的に認識させるように努力することこそ、われわれ泌尿器科学を専攻するものの義務であると考えらる。

それには色々方法があろうが、筆者はその一つとして、他の分科への進出というか、いわゆる P・R をすることが必要と考えるものである。もちろん、単なる宣伝では決してない。要するに、泌尿器科学会という殻にだけ閉じ籠つていないで、機会あるごとに、それぞれの業績なり経験なりを、外科や婦人科のみならずその他の学会に発表することである。幸い、泌尿器科には他科と関連をもついわゆる領域疾患が少なく、その気になればこのような機会は極めて多いからである。筆者はこれが泌尿器科学を本当に認識理解させ、その正しい発展と拡大を助成する一つの方法と考えていいる。

もう一つの方法は、泌尿器科の特殊性を強く推進することである。つまり、泌尿器科学は男性性器学という独自の分野をもつていいるからである。筆者がこんどアメリカを廻つた時、「お前の専門は？」ときかれ、Urology と答えると、「ああ、G. U. か」ということが2度あつた。Genito-urinary surgeon の意味である。そして筆者は、泌尿器科ではやはり G.&U. という独自性を育成すべきことを痛感した。前立腺などはその一つであらうが、その他にも genital tract についてはまだまだ研究すべき未開拓のところがいくらか残つていいる。そしてこれまでこの方面は、あまり重視されていなかつた谷間でもあつたが、実際には泌尿器科だけがやれる特殊の分野なのである。Genito-urinary surgery とは単なる素人の言葉ではなく、泌尿器科学の本態であることを、われわれ泌尿器科医は再認識して、その開発に努力しなくてはならない。これがまた、泌尿器科学の発展を助長することになる。